

中国における日本研究の現状：歴史・文化を中心に

著者	孫 春日
雑誌名	世界の日本研究
巻	2019
ページ	85-90
発行年	2020-03-31
URL	http://doi.org/10.15055/00007447

中国における日本研究の現状

——歴史・文化を中心に——

孫 春日

日中関係の歴史的な特殊性のために、中国学術界において日本研究は一貫して極めて重要な位置を占めてきた。すなわち、研究者の多さ、研究分野の幅広さ、研究の歴史の長さといった特徴を有している。また全国的な学会や専門的な学術誌も存在する。中国の日本研究については、李威編『当代中国的日本研究〔現代中国の日本研究〕（1981-2011）』（中国社会科学出版社、2012年）に続き、中国社会科学院日本研究所『日本学刊』編集部編『中国的日本研究著作目录〔中国の日本研究著作目録〕（1993-2016）』（2017年）において、より詳細な紹介がなされている。本目録は中国社会科学院の重点プロジェクトの成果の一つであり、日本の歴史、政治、外交、経済、社会、文化、文学、芸術などの研究に関する4716冊の著書目録を作成し、検索の便宜を図っている。本稿では先行研究との重複を避けるべく、主として歴史と文化に関する中国学界の日本研究について紹介したい。

現在、中国には「中国日本史学会」という全国的な日本史研究の学会がある。1980年に設立された本学会は、中国における日本史研究者の唯一の学術団体として、300人以上の正会員を有している。学会設立の趣旨は、中国における日本史研究者を結集し、日本史研究を幅広く推進し、より多くの研究成果を生み出し、日中双方の相互理解と交流に寄与する、となっている。本学会には、古代史委員会、近代史委員会、戦後史委員会、政治社会科学委員会、経済技術委員会、対外関係専門家委員会、中国思想文化史専門家委員会、青年研究者交流委員会など9つの専門委員会と、海外連絡部、書籍出版情報交換部の2つの部署が設置されている。

中国の日本史研究者は、主に北京、上海、天津、吉林、遼寧、延辺などいくつかの省と都市に分布している。なかでも、中国社会科学院の近代史研究所と世界史研究所、および北京、上海、天津、吉林、遼寧各省、市所在の社会科学院には専門の研究者が集中している。そして、北京大学、南開大学、天津大学、

遼寧大学、吉林大学、東北師範大学、延辺大学、浙江工商大学をはじめとする数多くの大学にも多数の日本史研究者が在籍している。それらの大学のうち、南開大学日本研究院は中国で唯一の研究院レベルの総合的な日本研究機関として、ハイレベルな人材を育成し、これまで多くの研究成果を発表し、中国における日本研究の中心的な役割を果たしてきた。現在、中国の各社会科学院は主として日本史研究に従事する専門研究者を集めているのに対して、これらの大学では研究のみならず、博士課程・修士課程の大学院生を育成している点も指摘しておきたい。

なお、中国における日本研究の専門学術誌として、中国社会科学院日本研究所が主管する『日本学刊』という刊行物と、同近代史研究所が主管する『抗日斗争研究〔抗日闘争研究〕』という刊行物がある。これらは中国における日本の歴史・文化研究に大きな影響力を持つ専門学術誌である。このうち『日本学刊』は総合学術誌として、日本の政治、文化、経済、歴史などに関する幅広い主題を掲載しているのに対して、『抗日斗争研究』は主として日本の中国侵略戦争の歴史や、中国の抗日闘争に関する研究を発表する場となっている。この他にも、『世界史研究』、『中国近代史研究』、『社会科学战线〔社会科学戦線〕』といった全国レベルの学術誌にも、日本研究に関する論文が掲載されることがある。さらに、日本史研究に関する論文を最も多く掲載している刊行物は中国各大学の紀要類であり、重要な役割を果たしている。例えば、南開大学日本研究院が発行する『南开日本研究〔南開日本研究〕』は、中国の日本研究に大きな影響を与えている。

具体的な研究成果について見よう。中国の改革開放以来、少なくない日本の歴史と文化に関する研究が発表されてきた。例えば、中国社会科学院が主管し編纂した『中日历史研究中心文库〔日中歴史研究中心文庫〕』というシリーズでは、これまで67冊に上る著書が出版され、南開大学日本研究院が編纂した『南开日本研究丛书〔南開日本研究叢書〕』では37冊の著書が出版された。復旦大学日本研究中心の『日本研究丛书〔日本研究叢書〕』でも20種類以上の研究成果が発表された。とりわけ、社会科学文献出版社が2001年から出版し始め、2016年に完結した『中日历史研究中心文库〔日中歴史研究中心文庫〕』は、中国各地の社会科学院、大学から著名学者を結集して、日本の歴史と文化に関する研究を進め、これまでの中国における最も代表的な日本研究の成果と言えよう。このように、中国の改革開放以来、中国学界における日本研究はすでに多大な成

果を挙げてきたことは疑いないと思われる。そこで、それらの研究成果をより詳細に検討すれば、以下の三つの特徴を指摘しよう。

まず、中国の改革開放後しばらくは日中関係が良好だったこともあり、通史的な著作が継続的に出版され、中国人学者が日本の歴史を研究する基礎が確立された。代表的な著書としては万峰『近代日本史』（中国社会科学出版社、1978年）、王金林『简明日本古代史』（天津人民出版社、1984年）、呂万和『简明日本近代史』（天津人民出版社、1984年）、趙建民・劉子葦『日本通史』（復旦大学出版社、1989年）などが挙げられる。これらにより中国本土の学者による一般的な日本通史、各時代史が揃ったと言えよう。

この時期は、日中関係が順調に発展し、両国の学界間の交流も活発化したことで、日本史を研究する研究者の数も、その研究成果も漸増していった。このような状況のなかで、中国歴史学界の第一世代ともいえる研究者のなかから、今後の中国における日本史研究に対する注目すべき史学理論と研究方向について、いくつか意見が提示され、日本人学者の歴史観と学派に関する紹介と評価が始まった。その代表的な論文としては、北京大学歴史学部の沈仁安と宋成有による「明治維新与近代日本史学〔明治維新と近代日本史学〕」『世界歴史増刊・明治維新再探討』（1981年）、「近代日本の史学和史観〔近代日本の史学と史観〕」『国外史学動態』（1983年第8期）、沈仁安訳「数量方法与美国历史学〔計量分析と米国の歴史学〕」『国外社会科学動態』（1983年第8期）、沈仁安「日本史学新流派分析〔日本史学の新学派分析〕」『歴史研究』（1983年1月）、同「日本史学流派的現状与趋势〔日本史学の学派の現状と動向〕」『国外史学動態』（1983年第14期）、「现代历史学与数量方法〔現代歴史学と数量方法〕」『国外社会科学動態』（1984年第8号）などがある。また沈仁安は「新的社会科学方法及其特征〔新しい社会科学の方法とその特徴〕」『国外社会科学動態』（1984年第1期）、同「开展日本史学史研究的几点意見〔日本史学史研究の展開に関するいくつかの意見〕」『史学史研究』（1985年第2号）、「历史学的思索〔歴史学の思索〕」『史学理論』（1988年4月）などの論文を通じて、日本の歴史学理論と研究方法の現状、および発展動向について評価した。

これらの論文で、沈仁安らは中国学界において日本史を研究する場合、中国の特徴を備えた研究体制を構築し、中国史学界の独自の立場、視線を確立することについていくつかの提案を行っている。すなわち、第一に、中国での日本史研究は、必ず中国の大地に立ちながら東隣の日本を見、中国人としての視点

を持ったものでなければならないこと、第二に、中国人の伝統的な「全方位的思考」方法を遵守し、中国人学者の独自の研究理論と歴史観に立脚して日本史を研究し、中国人学者の度量と分析能力を發揮すべきこと、第三に、日本史研究に対する中国人独自のメリットを活かすべきこと、例えば、中国には2千年間にわたる歴史史料が蓄積されているとともに、考証学などの伝統的な研究方法がある。第四に、研究と応用を組み合わせ、外国の歴史の経験を学び活用すべきこと、第五に、日本語の漢字の語彙をそのまま模倣するのではなく、流暢で正確な中国語で論文を書き、論文に“外国語”が溢れることを避けるべきこと、などである。

次いで、小泉純一郎、安倍晋三が相前後して首相に就任すると、日中関係は悪化したが、これにともない、中国史学界の日本史研究は、それまでの古代の文化交流や一般的な通史から、日中関係上のデリケートな問題となっている南京大虐殺、七三一部隊、性奴隷（いわゆる慰安婦問題）、日本の政治家の靖国神社参拝、釣魚島をめぐる領土権問題などへとその焦点を移していった。

この時期の研究の特徴は、幅広い領域にわたり、研究成果の量も膨大であるが、そのほとんどが日本の中国侵略の歴史を明らかにすることを目的としている点で共通している。例えば、近年発表された代表的な成果だけ見ても、史桂芳『同文同种的骗局〔同文同種の欺瞞〕』（中国社会科学文献出版社、2002年）、史丁『日本关东军侵华罪恶史〔日本関東軍の中国侵略罪恶史〕』（中国社会科学文献出版社、2005年）、王希亮『战后日本政界战争观研究〔戦後日本政界の戦争観研究〕』（中国社会科学出版社、2005年）、歩平『跨越战后日本的战争责任〔戦後日本の戦争責任を越えて〕』（中国社会科学出版、2011年）、殷夏『伪满历史文化与现代中日关系〔偽滿歴史文化と現代日中関係〕』（商务印书馆、2014年）、戚其章『甲午战争史〔日清戦争史〕』（上海人民出版社、2014年）、李継鋒『中国抗日战争全记录〔中国抗日戦争全記録〕（1931-1945）』（21世紀出版社、2014年）、上海市档案馆『日本侵略上海史料汇编』全3冊（上海人民出版社、2015年）、王晓峰『伪满时期日本对东北的宗教侵略研究〔偽滿時期日本の東北に対する宗教侵略研究〕』（中国社会科学文献出版社、2015年）、張国通『二战时期日本强征“慰安妇”罪行采访纪实〔第二次大戦期日本強制慰安婦罪行インタビュー〕』（中華書局、2015年）、王向遠『日本对中国文化侵略〔日本の中国に対する文化侵略〕』（昆仑出版社、2015年）、陸奥宗光『日本侵略中国外交秘史』（龔徳柏訳、河南省人民出版社、2016年。原著は陸奥『蹇蹇録』）、江口圭一『日本十五年侵略戦争史：1931-1945』（楊棟梁訳、江蘇

人民出版社、2016年。原著は江口『十五年戦争小史』、何建明『南京大屠杀全纪实〔南京大屠殺全記録〕』（江蘇教育出版社、2016年）、朱新偉『绝对欲望，绝对奇异：日本帝国主义的生生死死〔絶対的欲望，絶対的奇異：日本帝国主義の生と死〕1895-1945』（中央編訳出版社、2017年）などが挙げられる。中国人歴史学者のこれらの成果は、中国に対する日本の侵略過程を総合的に研究したものであり、中国社会における抗日の記憶を喚起することに相当の役割を果たした。

最後に、日中関係の影響を受けて中国学界における日本研究の焦点がどのように変化したとしても、ある一貫した特徴を有していることを指摘しなければならない。それは日本の思想と文化に対する研究は中断されたことがなかったという点である。また、他の分野に比べ、これらの分野は学術的に良質の成果をあげたといえる。例えば、王金林『日本天皇制及其精神结构〔日本天皇制とその精神構造〕』（天津人民出版社、2001年）、同『日本人的原始信仰〔日本人の原始信仰〕』（寧夏人民出版社、2005年）は、豊富な資料によって多面的に日本人の精神世界を提示することに成功した。また、宋成有『新編日本近代史』（北京大学出版社、2006年）は、可変性と連続性という観点から、近代日本の発展に影響を与えた多様な問題について新たな解釈を試みている。周松倫『近代日本社会转型期研究〔近代日本社会の轉換期研究〕』（東北師範大学出版、1998年）、李文『武士阶级与日本的近代化〔武士階級と日本の近代化〕』（河北人民出版社、2006年）は、日本の近代化に対する独自の見解を提示した研究といえよう。また楊棟梁『日本现代化历程研究丛书〔日本近代化過程研究叢書〕』（世界知識出版社、2010年）は、近代化論の観点から、全体性、体系性、学術性の結合の原則に基づき、より豊富な史料を活用して経済、社会、文化、外交の諸側面から、19世紀以来の日本近代化の内部要因と外部要因について検討した。韓東育『日本近世新法家研究』（中華書局、2003年）は、日本近世の儒学を東アジアの視点から考察し、主に日本の「脱儒入仏」の過程について論じている。また、李卓『“儒教国家”日本の実像〔「儒教国家」日本の実像〕』（北京大学出版社、2013年）、劉金才『町人伦理思想研究：日本近代化动因新论〔町人倫理思想研究：日本近代化動因新論〕』（北京大学出版社、2001年）、叶渭渠『日本文化史』（広西師範大学出版社、2010年）、叶渭渠・唐月梅『日本文学史 近古卷上・下』（昆侖出版社、2003年）、趙德宇『西学东渐与中日两国的对应〔西学東漸と日中両国の対応〕』（世界知識出版社、2001年）、劉岳兵『日本近代儒学研究』（商務印書館、2003年）などの著書も学界に大きな影響を及ぼした。

以上のように、中国学界による日本の歴史研究は、全体的には一定の成果を挙げていると見てよいが、見過ごせない問題も多い。例えば一部の研究には研究者の問題意識や、独自の研究視角が明示されているのに対して、少なくない著書、論文がなお単なる日本の研究の紹介ないしは模倣にとどまっている点である。また、壮大な研究テーマに比して具体的な研究内容に乏しいものや、緻密な論証に欠けるものも存在している。特に、早急とも思われる各種「叢書」のなかには、質的に問題を残した研究も散見される。したがって、今後、何よりも必要なのは研究者の問題意識が深度ある実証研究をともしつつ、現在の中国の特性に適合した日本史研究の方法と理論を構築することを通じて、研究の質を向上させることであろう。それこそが現代中国の日本研究者が直面している長期的な課題である。

(そん しゅんじつ 中国・延辺大学人文学院 教授)